

主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の
集団として積極的に活動していきたいと思えます。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本
に深く根を下ろした生鮮な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒302-0001
茨城県取手市小文間4401-1
福田玲子 TEL / FAX 0297(85)6665

2021.2 No.108

CONTENTS

- 1p 巻頭言 ……森脇 ヒデ
- 特集 **コロナの時代と
アートのちから**
- 2~5p ●**リレー書簡
～今をつなぐ**
「アートの力を発信できるか」
……………田中 和枝
「普段と違う目線で宝探しを」
……………坂本 勇
「絵と人生が交差する場」
……………大西 佐頼
「絵の中でもっともかげば
いいだけ」……………十河 幸喜
「エコール・ド・ツガル」
……………三浦 順子
「制作とコロナは切り離す」
……………見藤 瞬治
- 6・7p ●**祈りのかたち、
護りのかたち**
疫病と西洋美術
……………種倉 紀昭
疫病と日本美術
……………岡本 裕介
コラム/角大師護符
- 8p ●**主体展のコロナ対策
●研究部より**
「主体Webギャラリー2020
～今をつなぐ～」報告
- 9p ●**エッセイ** ……水村喜一郎
- 10・11p ●**2020年主体展
出品者アンケート**
- 12p **インフォメーション**
展覧会記録
編集後記・その他



「雪原」大口 満

「～ゆっくり時間をかけて～」

森脇ヒデ

研究会の友人は私に学級委員長というあだ名を付けている。真面目ではあるが、悔やむような失敗を良くするから、間抜けな委員長だ。巻頭文を引き受けてしまったのもその一つで、その柄でもないのにと後悔しきりだ。

80年余りも昔のことだが、父の赴任先の旧満州の小学校に入学した。ある日、母と広範囲をトタン板で囲って焼いた地区を通った。母はベスト患者が出た話をしてくれたが、この恐怖は事あるごとにフラッシュバックした。

突如、新型コロナウイルスの流行がやって来た。流言飛語、差別や死者の権利を無視したテレビ報道に、あの焼土の記憶が甦った。未知の病気は不安だらけだったし、何も出来ない焦りは誰も経験したことだろう。

体と頭を動かさねばと、一日の時間表を作った。さらに、当たり前がどんなに幸せなのか考え直した。私には「絵仕事」と「体に良い食事作り」があった。毎日何か絵の作業をし、又手早く美味しい料理を作っては、結婚したばかりの孫達にLINEで伝えた。そんな時、コロナのことはすっかり忘れて夢中になった。まさに「絵の力」と「食生活」が、心身のエネルギー補給となり、急場を乗り越え、自分を取り戻す手段となった。常日頃、絵は見てくれる人がいて、料理は食べてくれる人がいて、生きると思っていたので、これらの力を借りて明るみが見え動き出すことが出来たのだ。

さらに、外へ向けて一歩踏み出すことが出来た。LINEで教師をしている姪に取材し、私のコラージュに子どもの声を載せたシールを作成し、配布した。パソコンの協力は若い世代に依頼した。「絵の力」の反響と、世代を越えた支えは、老人を孤独から救ってくれた。

画伯坂本善三の生涯の弟子だった坂本寧氏の著作「善三先生と私」の中の先生の言葉「阿蘇を見ていると視線は空へと進み、自分の頭上に展開し、背面の空へと伸び、自身の足元から阿蘇五岳に繋がっていく。絵は後ろも描く気持ちで」を引用し、寧氏は自分の後ろを知って筆を取った先生だったからこそ、どんな小品も四方に拡がり宇宙感を感じるのだと述べている。こんな時だから、描く心と生き方を示唆した言葉だと、一段と心に沁みだ。

私のテーマは「栲」。広辞苑には大木の切り株とあり、神が宿るとも言われている。情報があると、あちこちに大樹を見に行った。自然のままの樹が好きで、叢に入り虫に刺されながらスケッチした。風雪に耐えて樹形を変えながら凜とした佇まいは力強い。朽ちながらも次世代を守り育てるひこばえは、生と死の共生の姿を見るようで神々しい。また、異種の植物を根付かせた寛容さにも感激した。

永年児童福祉に携わり、弱い立場の子どもや母親に寄り添ったが、環境を整え巣立って行った姿を見るにつけ、人の素晴らしさに驚いた。私としては、人々と関りながら育てていく人生を絵に込めたいと思っている。

コロナによって生活様式は一変したが、樹形のように、変化の機会と捉えたら、ウイルスに負けたことにはならないだろう。

大作の実験のつもりで、絵日記のように描いたものは、随分貯まった。これからもその都度自分に出来ることを問い続けて行きたい。

原稿を書くことで、現状を受け入れ、心の整理が出来た。この機会を与えて下さった主体美術に、心から感謝する。

「リレー書簡～今をつなぐ」

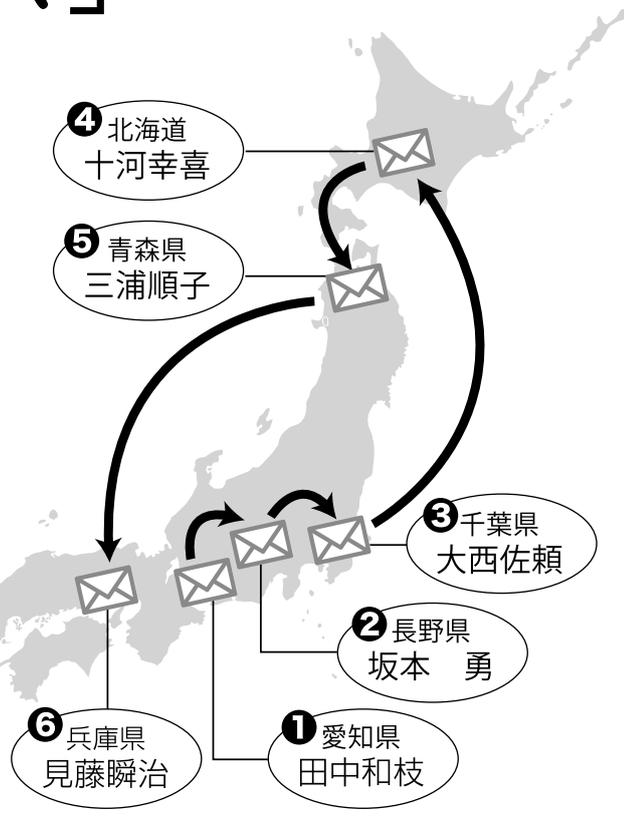
2021年が幕を開けました。しかし世界を震撼させている新型コロナウイルスの惨禍は依然として収束する気配はありません。ヨーロッパの主要都市は再びロックダウン、日本でも大晦日の東京都は1337人の新規感染者が確認されて、首都圏は1月7日に再び『緊急事態宣言』が発出されました。

東京オリンピック同様、昨年延期された主体展も2021年の開催に望みを繋ぐことになったが果たして状況はどうなっているか…。

コロナ禍の2020年秋～冬、絵描きたる我々の仲間どんな想いで日々を過ごしているのだろうか…？ 主体展の会員諸氏に心の内を聞いてみたい。そんな素朴な想いからこの『リレー書簡』という企画を考えました。

『コロナの時代とアートのちから』をテーマにA→B、B→C、C→D…と日本各地の6人の会員で手紙をリレーしていただきます。

さて、拝啓・田中和枝様。このコロナ禍をどのような心境でお過ごしですか？ 作品制作は進んでいますか？ この混迷の時代、『アートの力』って何でしょう…？ お便り発信をお願いします。(編集部)



愛知県 田中和枝さん ▶ 長野県 坂本 勇さん

「アートの力を発信できるか」

坂本勇様、お変わりないですか。編集部から『コロナの時代とアートのちから』というテーマで坂本さん宛にお手紙を書いて欲しいと頼まれました。

毎年、お互いの絵画を通して接していますが、今年はそれも叶いません。こんな時にあって、近況報告、安否確認をするようなリレー書簡がとても面白い企画だと思いました。

もうすでに8ヶ月以上、新しい生活様式が続いています。以前は本当に気楽なものでした。現在が最悪だと思いたいです。

このようなときでも、間違いなく季節は巡ってきて、郊外へ足を伸ばすと黄金色の稲穂が頭を下げ、広がる田園風景には爽やかな秋風が吹き抜けています。世の中こんなに大変なのに、目の前に広がるのどかな景色は何か、まやかしの様に思えてきます。

この幽閉生活の中、坂本さんを始め、皆様はどの様に過ごしているのでしょうか。少し前、機関紙にアトリエ訪問が掲載されたので坂本さんの制作現場は想像できます。整理整頓されたあの広い場所で、きっと制作は捗っている事と推察しています。

今年の主体展は延期になりました。決められた締め切りがあると筆を置かざるを得ないですが、もっと何とかなりそう思うからでしょうか、締め切りのない今年は作品が仕上げられませんでした。他にも描いてみましたがどれも同じで、時間がかかるばかりです。

その事が自分の障がいになっているのかどうか、現在はもう思い切り絵画から遠ざかっています。制作が辛くて向き合えない自分が避難するところは近くの図書館だったり、家にいる時は映画三昧の毎日です。ちょっと運動不足が気になる所ではありますが。

どちらかというと小品を描く方がまだ楽しいです。即興演奏が許される音楽のように、プロットを決めて描かなくても何とかなるし、早く仕上がる



「あつせ」 30s

(と自分では思ってる)し、失敗したと思ってもすぐやり直しが利きます。大作はそうはいかない事が多い。小品のように描いていっても、形がつきにくく、その内だんだんと出口が見えなくなって不安が増幅してきます。振り出しからそこに至る自分の気持ちは分かっているはずなのに。

コロナの時代はいざ知らず、私にあってはアートの力を自ら発信できるか否か、答えは明らかのようにです。

つれづれに書いて参りましたが、ご健闘をお祈りします。



▶ 長野県 坂本 勇さん ▶ 千葉県 大西佐頼さん

「普段と違う目線で宝探しを」

お手紙受け取りました。まずはご無事で何よりです。コロナ禍の続く中、ご自身の内面を見つめる田中さんの想い、ひしひしと伝わりました。

さて、私も自分のことを語らねばなりません。

大西さん、初めまして、坂本です。

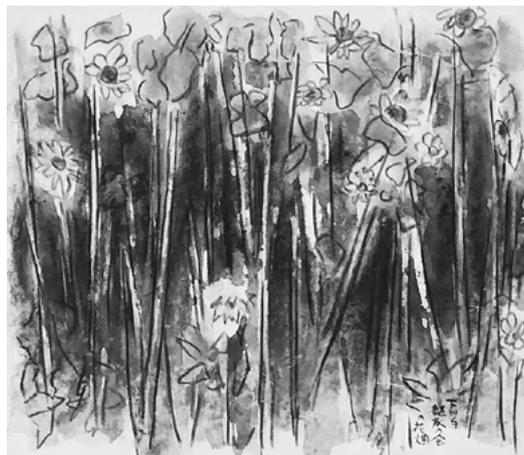
まだ一度もお会いして話した事もない方に手紙を書くのは初めてです。これも初体験ばかりつづく年としては不思議な出来事ではないですね。最近是人を覚えられなくなっていて申し訳ありません。よろしくお願ひします。

昨日、信州高遠美術館が主催する「スケッチ講座」に講師として参加しました。当初は6月の予定でしたが、募集人員も半分の10人にして実施されたものです。何人集まるか心配されましたがおかげさまで予定以上の参加がありました。寒くもなく周りにもあまり人もいなく環境は良かったのですが、惜しいことには紅葉は全く進んでいなく目玉がありません。そこで「目玉がないからこそ普段と違う目線で宝探しをしよう。きっと新しい発見がありますよ。」ということでスタート。そんな心配をよそに皆さん2時間という短い時間で集中して描いている姿に一安心しました。

外出自粛などから徐々に日常を取り戻し、マスク越しでも生き生きとした笑顔が印象的でした。一人ではちょっと不安でも人と関わることで、次のステップに進めるのかなと感じた1日でした。

地元の美術会で主催する屋外研修会は常に新しいところに出かけ、一人ではいけないような所へも行って、それはそれで助かっていますが、この講座は桜で有名な高遠公園の中にある美術館でその周辺で毎年行われています。遠くへ出かけなくても身近なところにくらでも良いところがあるということを知ってほしいという思いを伝えるのにとっても良い機会となっています。

今年は出品予定された5つの展覧会とその関係する行事が全て中止となり、飲み会も一度もありませんでしたので時間は充分にありました。そ



「ひまわり」 24×27 cm

で来年予定されていた分までの2年分の作品に手をつけ、少しでも先行できればという気持ちでしたが、あと少しのところまでストップ。まだ1枚も完成をしていません。やっぱり締め切りは必要のようです。

一方で絵を描き始めてからは常に展覧会を目標に設定してそれに向けて描いてきたため、毎年毎年展覧会に追われっぱなしでした。ちょっとひと息入れる良い機会ともなりましたね。現在手元にある小品から大作まで全てを撮影して整理してみました。年齢のことも考えここから何かが見えてくることも期待しているところでもあります。

それではコロナに気をつけて、来年の主体展で会えるのを楽しみにしています。

2020年10月25日 坂本 勇



▶ 千葉県 大西佐頼さん ▶ 北海道 十河幸喜さん

「絵と人生が交差する場」

坂本さん、お手紙ありがとうございました。まだ一度もお話したことないのに、なんだかとても身近な人に感じます。私も坂本さんの想いを受け止めつつ、次へ繋がります。

十河さん、いかがお過ごしですか。大西佐頼です。十河さんの絵を思い浮かべながらお手紙差し上げます。

疫病の流行なんて、一年前には想像もつきませんでした。

4月に緊急事態宣言が出るに至って、私は呼吸器の持病もあるので現実的な問題として死のリスクを感じました。夫には、万が一私が死ぬようなことがあっても、私は貴方が幸せに生きていてくれたらよいから、私の持ち物は好きにしてくれてよいし、別の人と結婚してくれてもよい、などという話を真顔でしたりしました。自営業の仕事は殆どが止まってしまう精神的にもどん底でしたが、たっぴり寝る時間もまともな食事をする時間もできたために血色が良くなり、かえって健康になったのは皮肉な結果でした。

死ぬかとも思ったら、やりたかったのに今まで後回しにしてきたことを後悔しはじめました。どうしてあれを見に行かなかったのだろう、あの人に会いに行かなかったのだろう、本当はあの素材を使ってみたかった…等々。宅配便の受け取りや食料品の買い出しをしないわけにはいかないし、わずかばかりリスクを下げるために家にこもるよりもやり残したことをやってみよう、という気持ちになってきました。

幸い、今では東京周辺ではそれほど神経質にならずに生活できるようになっています。

それでも外出はそれなりに命がけという感覚はあって、命のリスクを冒すほどではないかな、というところには行かなくなりましたし、体調が悪いときに無理して出かけることもなくなりました。

絵のことを書いていませんでした。今年主体展に出そうと思って描いて



「会話」

いたS100号の絵は途中のまま立てかけてあります。都美術館のような広い場所に展示できる目途がないのかと思ったら身が入りません。誰一人見てくれなくても描く、といつも言っていますが、人に見てもらいたい気持ちもあったようで、それに気づかされました。もう少し小さい絵は展示できる機会がありそうです。それほど後ろに退かなくても全体が見えて描きやすいですし、実験的なことにも取り組みやすいので、しばらくは、中〜小品が続きます。

このまま何年もコロナの時代が続くのかもかもしれません。

1年のうち七夕にだけ彦星と織姫が会えるように、主体展を、1年に一度だけ多くの方々との絵と人生が交差する場として大切に思っていました。今年は叶いませんでしたが、また主体展の会場で絵を拝見したりお話ししたりできるのを心待ちにしています。

2020年11月8日 大西佐頼



▶ 北海道 十河幸喜さん ▶ 青森県 三浦順子さん

「絵の中でもっともがけばいいだけ」

大西さん、お手紙ありがとうございました。拝読いたし、思うところを綴らせていただきます。

「日常」「当たり前」「ルーティン」という言葉や行動を、意識せずとも変えることを強いられ、策を講じようにも「朝令暮改」の現実。その都度の対処対応に「何なんだ」と、指示命令システムに対し呟く…。誰に頼まれたわけでもなく絵を創ることとは別物。しかし考えようによっては似ているところもあるような…これで良いと思ったら、もう絵は描かないな、きつと。わかんないから描き続けられる。そして次の制作があるんだろうとも思う。何か、絵を描いている時が一番辛いかもしれない。それを長い間継続していた。

これで良い、このまま行けるとしたら、ウイルスには勝てないのか？ 奇しくも手紙を受け取った日、北海道は過去最多200人の感染者情報。しかし私の生活圏では大きい変化はなく過ごせているのです。地球規模の問題でありながら自身の尺度は身の回りであり、日本地図に載せられた数字や棒グラフが映るメディアには実感が持てていないのです。現実味が無い環境なのです。…かと言ってです、かと言ってなんです。

気がつかずとも、2月から絵を描いていません。アトリエに入るも対座半日。そんな日が何回あったらうか。ここ数十年、年に2回まとまった期間を定めた中で制作をしてきました。「今はやめとこう…」と、その期間を設けなかったのです。1日の中で空く時間は以前よりも多くあったものの、情勢の変化に左右されるだろう現実味のない動揺が、制作をしない現実をもたらしめているのだろうと、他人事のように分析している自身がいます。何だろう?! 多面性生存体とでもいうのだろうか、自身は独りでありながら、何人で、何箇所、何通りの立回りや生き方をしたのだろう…。これは確かに、新



「ホツタラケ〜解体身上〜」 130F

しい生活様式だ。もがいているんだろう…。絵の中でもっともがけばいいだけなのに。単純なのに…。マイナスに転じる物事もあれば、プラスに転じることもある。まさかという坂を上り坂に捉えるのか、下り坂と捉えるのか。平坦な路はないんでしょうね。ないんですよきつと。

美術って既存の上書きじゃないんだよな… ソコを越えよう。越えるから「生きるチカラ」になるんじゃないのかな。

さて、三浦さんはいかががお過ごしでしょうか？

2020年11月10日 十河幸喜



▶ 青森県 三浦順子さん ▶ 兵庫県 見藤瞬治さん

「エコール・ド・ツガル」

十河さん、お手紙読ませていただきました。ありがとうございました。

私の心境を少し語らせていただきます。この度、「リレー書簡」という形での原稿ですが、十河さんから私、私から見藤さんと、お二人の名前を見ただけでも、作品が頭に浮かび上がってきます。

記憶も虚ろになりましたが、自分の初出品は、1998年頃であったかと思えます。真夏の暑い中、アトリエにこもり、受け渡し間近まで描き続け、サーフェスコートをかけ搬入。そして、9月1日には上野で「主体展」を観るというのが、自分の中では一年の最大イベントでした。20数年以上続いた年間行事となっていたため、作品を見れば制作者が誰かも分かるくらいです。何が起るか分からないのが世の中、今年は「主体展」が開催できないという予想だにしなかった残念な現実が起きました。

自分にとっての「熱い夏」がないとは…。何か足りなく、季節感さえ感じない気がします。「当たり前」であること「普通」であることが一番幸せだったんだな、と感じるこの頃です。

東北地方は、当初、感染者も無いに等しい状況でしたが、医療従事者という職業柄、暗黙の了解での行動制限を行ってきました。この度、地域での爆発的なクラスターの発生より、緊張感は増し、毎日が緊迫し、ストレスとの闘いとなっております。

現在、大作の制作には取り掛かれませんが、「アート」には、そのストレスを忘れさせる力があり、自分を支えてくれています。

私の絵の師匠(故人)が言い続けた「エコール・ド・ツガル」という言葉。津軽を拠点に様々な人々が集まり、刺激し合い個性のある芸術を発信していきたいという夢の構想です。私はその夢を受け継いで活動しています。地元美術会の会員のほか、SNS作品展、地元メディアなどを通じ様々な「アート」仲間が訪れ、情報共有の場ともなっております。仲間と自分の絵の世界の撮影に出かけたりして、現状を決してマイナスには捉えず、楽しみながらの、次の作品の構想期間と考えています。

「当たり前」だったことが、できなくなってしまう御時世ですが、ポジティブ



「懺悔」 100変形

な性格上、負けてはいられません。これも一つの充電期間。県内でのみの移動ですが、「鷹山宇一記念館」に行ったら、初めて「主体展」の図録を見て出品の意思が固まった事を思い出したり、「アート」作品を観ては、必ずと言っていいほど「主体展」が脳裏に浮かびます。

大作を描きたい、会場で皆の作品を観て話したいという強い思い、気持ちの繋がりは皆、同じだと思います。コロナの時代に負けない、フル充電した次年度の「主体展」、期待の気持ちでいっぱいです。

さて次は神戸の見藤さん。今年のコロナ禍をどう過ごされたのでしょうか？

2020年11月18日 三浦順子



「制作とコロナは切り離す」



「変容」OS

こんにちは、三浦順子様。
遠く青森からのお便り楽しみにしていました。過去数年の作品を思い出しながらい興味深く読ませて頂きました。生活や制作に大きな影響が出ている様子、様々な負けない想いを感じます。

コロナの影響が出始めて以来、作家展や本展・巡回展等の中止が報じられる中、皆さんが自分の絵画に対してどのようなスタイルを選択しようとしているのか徐々に聞こえてきました。この半年間で何人もの方から個展のDMを頂きましたが、ほとんど足を運んでいないのが現状です。制作の様子もいろいろ聞かせて頂きました。私としても、主体での発表が無くなるだろうと思った春先に自分の道を再確認し、そのまま現在に至っています。まず発表の有無に係わらず今まで通りに制作する事。主体展出品作は完成させる事。次の個展に向けての準備をする事。制作とコロナは切り離す事とし、生活や健康には十分に気をつけて歩みますが、こと芸術面については、焦らず常にマイペースで行くつもりです。

只、発表の場が長期にわたって失われる事だけは何とかならないものと危惧し、自分に合った解決策を模索中。主体展の延期が決まった時、ほぼ完成していた作品の見直しをする機会を与えてくれたと何故かほっとした事を思い出します。近年、出品直前になって納得のいかない部分が増えていました。今回もすっきりしない気持ちで取り組んでいた箇所を触り始めた結果、二枚組の一枚を下地から塗り直す羽目になり、夏を過ぎても仕上がらない作品に苛立ちを感じつつも、今の自分に何が出来るのか自問自答、その結果が発表なんだと信じて制作を続けています。また私の制作方法の一環でパネルを自作することが多いのですが、小品パネルは随分完成しました。準備だけは万全の様です。

年配の知人がDMと一緒に「今、発表しないといつできるか分からない

ので予定通り個展をやらせてもらいます。」との一文が添えられていたのが印象に残っています。その方は、過去の作品も多数展示されていました。こんな時だからこそ制作・発表している事実が大切だと言い切る方もいらっしゃいました。それぞれの方法でこの一年間を過ごされたと思いますが、制作者としての悔いだけは残さない様に心を決めたいですね。思い通りにいかなかった方々の声や失敗談もいずれ聞こえてくるでしょうが、このコロナ禍をも自分の糧として次回の主体展では楽しく話ができればと期待します。

最後になりましたが、この機会を与えて下さった事務局の方々や書簡をここまでリレーしてくれた五人の方に感謝の気持ちを添えて、編集部にお返ししたいと思います。これを書いている今、コロナの第三波が押し寄せています。くれぐれも皆様ご自愛ください。

2020年12月3日 見藤瞬治

リレー書簡を終えて 編集部より

田中さん、坂本さん、大西さん、十河さん、三浦さん、見藤さん、
リレー書簡のご協力ありがとうございました。コロナ禍ならではの機関紙の企画、いかがだったでしょうか。皆さんの感想をお待ちしています。

『手紙という古めかしいメディア』

ここまで6人の会員の方々、書簡のリレーをありがとうございました。2020年秋から冬にかけて、日々様子や心の内を率直な言葉で綴ってくださったお手紙を、大変興味深く拝読いたしました。皆さんがコロナ禍をどう受け止め、何に想いを巡らせているのか、よく伝わりました。

かく言う私も、昨夏は制作に向かう心が定まらず、無為な時間を過ごしたひとりです。初めて経験する巨大な社会不安の中、絵を楽しむ、作品制作に集中する気持ちの余裕は無かった。アトリエでもキャンパスを前に呆然とする日々…。美術作家としての自我が沈黙してしまっ。再び絵筆を取れたのは秋になる頃だったでしょうか。

『…これを書いている今、コロナの第三波が押し寄せています。』という見藤さんの手紙の締めくくり。憂いのおり昨年末から1月にかけて感染者は急増、1月8日以降日本各地は再び『緊急事態宣言』下に入りました。

都市間の移動や人との接触を極力避けること。ウイルスは人を媒介にして広がっていくのだから厄介だ。主体展の我々も大人数での会議はキャンセル、個人的にも会うことは憚られる。しかしそんな状況下で、このリレー書簡、手紙という古めかしいメディアのコミュニケーションに私自身も励まされました。

皆さんの協力あってこそ、この企画が成り立ちましたこと、紙面にてお礼申し上げます。

(藤田俊哉)

『科学的に正しい知識を身につける』

機関紙の紙面上で手紙をやりとりするという企画は、昨今のコロナ事情の中、時間をとって語り合うことができない会員の絵に対する率直な思いが伝わり、興味深く読ませていただきました。

昨年の朝ドラのモデルとなった福島県出身の古閑裕而氏も、妻の金子さんとは頻繁な手紙のやりとりから、お互いの目指す道が開かれて成長していったといいます。離れていて会えないからこそ字間から思いが伝わるものなのでしょう。

現代ではSNSでの文章のやりとりがあるものの、相手がどう受け取るかを深く考えずに発したほんの冗談や噂話的なものに、尾ひれがついて深刻な事態に繋がったりしています。嘆かわしいことですが、気軽に拡散することで多くの人を傷つけている可能性があることを、利用者ももっと知るべきです。

特にこのコロナ禍では、感染者や医療従事者に対する誹謗中傷や差別が問題になっています。どんなに注意しても、社会生活を送る中で誰もが感染のリスクを負っています。でも、不安や分断は自ら学ぶことで解消できます。正しい感染予防策を取っていれば感染の可能性は低くなり、周りに広めることも少なくなります。報道・SNS・マスコミその他の煽りに惑わされず、科学的に正しい知識を身につけることを優先しましょう。

その上で今年の主体展は、美術館の感染対策を遵守し万全の対策を取って迎えたいと思います。できる範囲で構いませんので、皆さんのご協力を切にお願いいたします。

(山田礼二)



「疫病と日本美術」

岡本 裕介

佛教が日本に伝来したのは538年もしくは552年とされています。以後、佛教を中心とした文化が開花することとなります。また、この時期はじめて天然痘の流行が記録されています。仏教というものは今日の感覚の宗教というより、建築・土木、音楽・美術工芸、医療等々、色々な先端の科学技術や文化と言うものが含まれていたはずで、美術の分野では、天平時代が仏教美術のピークとなりました。東大寺の大仏建立を発願した聖武天皇は神亀元年(724年)2月4日に即位。

儒教はどちらかというと、政治哲学や道徳律の様な要素が多く、律令制の思想的な基盤でありました。大化の改新(645年)以降、法治国家として律令の整備に勤めてきた我が国ですが、この頃には、流民の発生や、開墾の非効率性などさまざまな矛盾が露呈してきます。当時の経済の基盤は、稲作にありますが、土地は国家が所有とし戸籍に基づき耕作する国民に終身を限りに配分されていました(班田収授法)。

天平4年(732年)には干魃がおき、同5年には飢饉疫病の流行、6年には大地震、そして7年から9年にかけて天然痘が爆発的な流行を見ます。この時人口の3割が失われたという試算があります。生産人口の減少は国家経済への打撃が甚大なものであったのは想像に難くありません。

租税の免除等々の政策を打ち出しますが、一方で聖武天皇は自らの為政者としての不徳を自覚し、政治理念の基軸を仏教思想に移します。疲弊した国力を回復するため各国に国分寺・国分尼寺の建設や、遷都などを行いますが、明らかに失政であったのではないのでしょうか。天平17年(745年)に再び平城京に遷都、この年より現在の場所に大仏の建立工事が始まります。

律令体制の元では、仏教は国家の管理下に置かれていたのですが、行基という僧は集団で私的な開墾や社会的なインフラ整備をすすめ、また街頭で違法な説法や治療行為などを行い、国家には好ましくない人物でした。

私的な社会事業などは律令体制では認められるはずはありませんが、集団による開墾や耕作は圧倒的な生産性があったと考えられます。

聖武天皇は、彼をして大仏建立の勧進を行わせました。行基とその集団を体制に取り込んだ事が、大衆の支持を集めることとなります。仏教の思想的な本質の一つには衆生を救うことにあると思われませんが、彼には、経済的に裕福な層から、一般市民まで多くの支持者がいた模様です。

行基集団の仏教の理念に下すく社会資本整備の手法の導入は一時的な成功を見たようです。しかし、有力寺院や貴族に私的な開墾や土地私有を認めざるをえなくなるなど、律令体制の崩壊の原因となりました。

天平時代は疫病や飢饉が一つの引き金となり、国家主導の政策が、大きな美術運動を展開して行った時代でした。大仏開眼供養は天平勝宝4年(752年)。それを見ることなく行基は天平21年(749年)に81歳で遷化しています。

- 参考文献 「東大寺の成り立ち」 森本公誠 著 岩波新書
- 「華嚴経入門」 木村清孝 著 角川文庫
- 「原色日本の美術3 奈良の持院と天平彫刻」 小学館
- 「疫病の日本史」 本郷和人、井沢元彦 著 宝島社新書



(左)月光菩薩
長年、法華堂の空窠索観音の脇侍でしたが、現在は東大寺ミュージアムに移動しています。
一説に、梵天帝釈天であったとも言われています。技法は塑像です。
ちなみに、近年、東大寺ミュージアムや興福寺の中金堂などが落成し著名な仏像がかなり移動しています。

(右)行基菩薩
近鉄奈良駅まへの噴水に立っておられます。大僧正の僧位を朝廷からもらいますが、民衆からは没後「菩薩」と呼ばれます。この像の撮影は岡本です。



◀奈良の大仏こと、毘盧舎那佛
華嚴経の教主であります。後に伝わる密教では大日如来とされています。
天平時代に作成された作品ですが、源平の動乱で消失、鎌倉時代に再建されます。再び戦国時代にも被災しています。現在の像は江戸時代の再建です。
オリジナルは、薬師寺の薬師如来に近い様式だったと思われます。「華嚴経」は天平8年に我が国に伝わったと言われています。

column

つのだいしごふ 「角大師護符」

角大師の護符を家の内に貼っておくと疫病神の災厄から逃れることが出来るという、厄除け信仰は現代でも根強く生きています。

●角大師(つのだいし)の説話

世に疫病が流行っていた永観2年(994)のある時のことです。疫病神が高僧 良源(慈恵大師、元三大師)にも襲ってきました。

「私は疫病神である。今天下に流行している疫病にあなたも罹らなければならない」

お大師様は「逃れられない因縁ならばいたしかたない。この指につけよ」と左の小指を差し出しました。

疫病神がお大師様の指に触れると、全身に激痛が走り、高熱を発せられました。しかしお大師様は精神を統一され、弾指し、法力をもって疫病神を退散させたのでした。

疫病の苦痛を体験されたお大師様は、「疫病をもたらす魔物の力はあなどりがたい。わずか一指でさえ、これだけの苦痛をもたらす。疫病に苦しむ人々を一日も早く救わなければならない」と発心され、弟子に全身大の鏡を持ってくるように命じました。

そして、鏡の前で静かに観念三昧に入られました。すると不思議なことに、鏡の様子は、はじめお大師様の姿であったのですが、だんだんと姿が変わり、最後には骨ばかりの恐ろしい鬼の姿になりました。降魔となったお大師様の姿を弟子が描き写し、その絵を版木に彫り、お札を刷って、お大師様自らが開眼の加持をされました。

「この札を人々に配布して戸口に貼り付けるようにすれば、邪魔は近づかず、疫病はもとより一切の厄災から逃れられるであろう」と弟子たちに示されました。このお札を頂いて、家の戸口に貼るとその家の者は誰も疫病に罹らず、また病気があった人も全快したと言います。

角大師と呼ばれる図像には、2本の角を持ち骨と皮とに瘦せさらばえた鬼の像を表したものと、眉毛が角のように伸びたものの2つがある。角大師の像は魔除けの護符として毎年正月に売り出され、比叡山の麓や京都の民家で貼られた。



主体展のコロナ対策

この原稿を書いている2020年12月現在、コロナウイルス感染症の第3波の感染拡大は依然衰えていません。一方では海外のワクチン接種開始のニュースが報道されています。この先も予断を許さない状況とは思いますが、事務局では2021年に第56回主体展が安全に開催出来るよう努めたいと考えています。

展覧会に係る『コロナウイルス感染症対策』については、会場となる各美術館の「感染防止対策」に従い検討します。「3密(密閉・密集・密接)」回避の観点から、展覧会準備のために多くの会員が集まる搬入、審査、展示作業には特に注意を払う必要があると考えます。

右記の通り、検討事項は多々ありますが、事務局では、今後のコロナウイルス感染症の動向を見守りながら、展覧会の準備を進めることとなります。今年の6月頃を目処に対策がはつきりするかと思います。それまでに会員各位には郵送等で情報発信を随時していきます。例年以上にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

具体的な検討項目

- 搬入・搬出の際の、出品者や搬入業者の方々との事務手続きのやりとり
- 例年多数の会員の参加する審査や総会。人数に配慮した会場の設定、座席の配置、発言の際の要領等
- 展覧会会期中の来場者の安全、作品集・ハガキ等の販売の要領変更
- 展覧会事務所の入室・滞在のルール等の検討
- 例年開催している行事(レセプション、アーティストトーク、会場研究会や講演会等)の開催可否の判断

東京都美術館の詳しいコロナ対策については以下のホームページをご覧ください。

都美術館 コロナ対策 **検索**



携帯・スマホはこちら

研究部より

「主体Webギャラリー2020 ~今をつなぐ~」報告

「主体Webギャラリー」の見方

<https://www.shutaiten.com/>

または

主体展

検索

携帯・スマホはこちら



榎本香菜子

もう何年も前のこと、故、橋本章さんが「主体展は祭りだ」とおっしゃった。会員皆が、思いっきり楽しく、のびのびと制作し発信しようじゃないか、との言葉と受け止めた。2020年、現在もなお収束しないコロナウイルスにより主体展の開催を断念した。審査を含め地方会員の参加を抜きにした主体展はたとえ開催したとしても「祭り」にはならなかつただろう。ざりとて、来年の9月まで何も発信しなくてよいのか。研究部、井上提案は、主体の今後にとって、新たな風を吹き込むように思われ、事務局一同賛成し踏み出した。まだまだデジタル環境にない主体美術の会員がなるべく多く参加しやすい形を考え、旧作もよしとした。そして、グループ展ではないのであえてメッセージではなく、コメントとして「今」を自由に語っていただいた。結果、131名、会員の85%の参加となった。一人一人の画と添えられた言葉を読んでいくと、展覧会場とは又違った感慨深いものを感じる。全員参加ではないにしろ、まさしく2020年、主体美術の顔が見えたような気がする。

井上樹里

「主体Webギャラリー2020~今をつなぐ~」と題し、準備室を設置、ホームページ担当の長沢晋一氏にご協力いただきながら、Webギャラリーの制作にあたりました。今年は従来通りの活動を断念せざるを得ないことから、新たな繋がり方を模索する必要を感じ、インターネット、特に身近なスマートフォンを活用できる発信を検討しました。キービジュアルには全参加作品を繋いだモニターを据え、準備室メンバーへトップ画像制作を依頼、集まった候補から事務局での投票を経てデザインを決定しました。Webギャラリーでは、画像を拡大したり、過去の作品を探したり、コメントを読んだり、本物の作品や図録を見るのとも異なる楽しみ方が生まれ、新たな角度から作家の魅力を広く内外に発信していく工夫が凝らされています。

本企画の制作運営では、全国の会員と繋がり、関わっていくことを目指してインターネットを介した計画を立てました。結果、社会的距離を保たねばならない状況にあっても全国各地の会員と協働して取り組むことができました。

年内公開を目指すなかで作業時間、初めての取り組みなど運営に至らない点多々ありましたが、準備室のご尽力により公開することができました。落合梨乃、オノミチヒロ、久我英輔、園田雅俊、長濱志保、新島知夏、前川アキ、三浦順子、山田礼二、渡辺良一、各氏へ深く感謝申し上げます。



▼ トップページ(最初のページ)から「Webギャラリーを見る」をクリック(タップ)



▼ ・全ての作品を見るをクリック(タップ)



▼ ・見たい作家の作品をクリック(タップ)

※作家一覧のページは5ページあります。最下部にページの切り替えがあります。

昨秋、編集部に一本の電話が。「今回の機関紙面白く読ませてもらったよ」水村さんからだった。続けて昔話や現在の主体展への想いなど、尽きぬ話題のアレコレ…。それを今回メッセージとして寄せていただくことにしました。

「思うままに」

水村 喜一郎

人はどうして生きてるんだろうと、浪人中の満男の問い。何て言うことをオレに聞くんだと言いながら、そりゃいつもとは言わないが、時々生きててよかったなあと思うことがお前にもあるだろう。だからじゃないのかあと伯父の寅さん。記憶ははっきりしないが、映画「男はつらいよ」の一場面。

人生って何とは言わないまでも何でオレは絵を描いているんだろうと思う時がある。誰に頼まれたわけでもない、絵はこれは描きたいんだなあ、自分の欲求で自分の為。何かを見て「描きたい描けるかなあ描いてみよう」で少年の頃から始まったような気がする。そして絵が出来上がれば「見せたい見て貰いたい」と言う気は起る。たまたま縁のあった所へ出し入選を重ねた。だけどどうも居心地が良くない。その頃、つまり二十歳の頃に「公募展無用論」が席捲した。自分も絵描きは個の仕事なので孤であるべきだろうと思ったりもした。で、暫くは一人で描いていたが思うに任せない。どうも上手くゆかない。できた絵が心もとない。誰かに何かを言って貰いたい。褒めてくれたりケチをつけてくれる人が必要だ。そうすりゃ前に筆が進む。つまり自分の場合は師や画友がいたほうが良いと思うようになった。「それでも公募展は潰れない」と、マスコミが騒ぎ出した頃と時を同じくしていた。

そこに主体美術があった。自分は好きな絵描きさんは多いが、新人画会の人達も好きだった。主体展初出品の絵を見に行った。四十六年前だった。凄い熱気ムンムンのデッカイ絵達の中で、薄っぺらな情けない絵に見えた。だが、こみ上げる嬉しさもあった。ここが第一歩。誇りを持ってここを主舞台に、ジャンジャン絵を描いてどんどん個展をしたい。

そして初心忘るべからずと言いきかせた覚えがある。とにかく先輩、友人ら絵描きらしい絵描きさん達に出会って感動した。中に入って頑張ろうと思った。

年に一度の上野の美術館では、晴れの日そ行き正装か。山を降りて銀座界隈の画廊では、みんなよく個展をしていた。飲み助が多かったからざっくばらんと言いたい放題。よってたかってワイワイガヤガヤと活気があって賑やかだった。初日のパーティーが重なっていると渡り歩いて酒、夕飯と言うチャッカリマンもいた。面白かったなあ。

今、思うこと。実力画家集団主体の作品はみんないいと思っている。真面目で懸命さがあって(それがよくないと言う人もいるが)。だから、もっと個展をすればと思う。本展でのデッカイ絵での自他との対決も大切だが、個展で自分をジッと見つめることも必要なのでは。新しい展開や変貌があるかも知れない。さまざまな友人も更に出来るだろうし、絵が売れて(売り絵はまずいが)赤丸が幾つか付けば御の字だと思う。

これから、これからだよと言ひ聞かせ、気がつけばいつの間にやらジイさんに。でも、まだまだ。人生は続く、絵を描くことも続く。頑張ろう、一緒に。



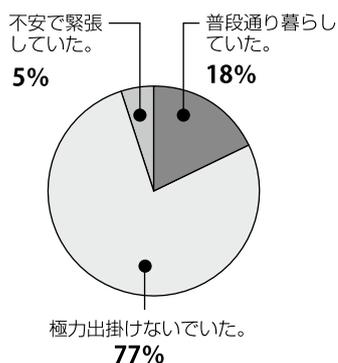
「旅で出会った風景とところ」
水村喜一郎 竹紙絵集より
「かさこ」

2020年主体展出品者アンケート

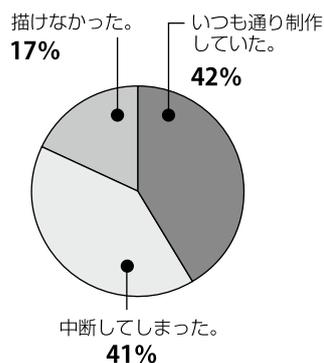
主体美術創立以来初めて、未知のコロナウイルス感染拡大により開催が中止となりました。間際まで、悩んだ末の苦渋の判断でした。主体展は会員と出品者の作品により構成されています。そこで発表の場を閉ざされた出品者の方々の「今」の様子を伺いたく55回展入選者を対象にアンケートを実施いたしました。やや大雑把な質問ではありましたが、ここに集計結果をお伝えいたします。

アンケート回収期間 2020年10月15日～11月20日
回収率 75%

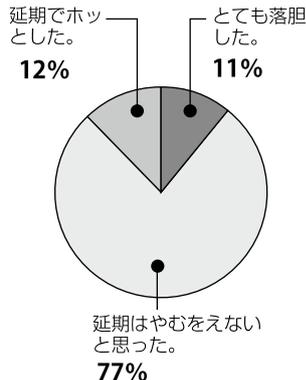
Q1 コロナ禍の下、どうお過ごしでしたか？



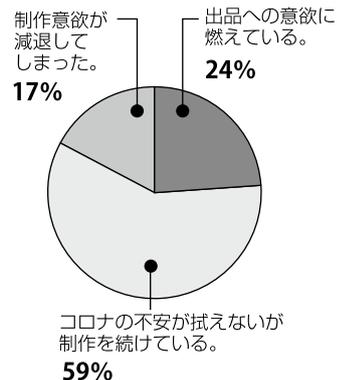
Q2 コロナ禍の下、絵を描けていましたか？



Q3 今年の主体展延期を受けて何を感じましたか？



Q4 来年の主体展について今のお気持ちは？



Q5 ご自由にご意見をお書きください。

- 小品ばかり描いていたので大作に勇気がいる。(女性)
- Webギャラリーを楽しみにしている。(女性)
- 締め切りが無い分、気楽で自由に描ける気がする。(男性)
- 70年生きて初めての経験だが、これも何かの役に立つかもしれない。現在上達のためデッサン・クロッキーで基礎を固めており、毎日楽しい。来年は大作を描きたい。(男性)
- 主体展が延期になったのは残念だったが、立ち止まってゆっくり考える時間が出来て良かった。(女性)
- 同時期に院展が開催され、主体展が開催されなかったのは残念に思った。コロナ禍の終息を願う。(女性)
- 事務局の方々が延期の判断などで大変ご苦労されたと思う。次は是非応募したい。(女性)
- その時々感じたことを大切にしていきたいと思う。(女性)
- 目に見えない物へどう対応していけばいいのか戸惑う日々だったが、慣れや学びもあり、最近絵も描けるようになった。(女性)
- 不測の事態に愕然として何かに集中するのが困難な状態が続いている。(女性)
- 来年の主体展が楽しみ。(女性)

- 会員の皆様のご心配、ご苦労本当にありがとうございます。また出品会場でお会いできる日を待っている。(女性)
- コロナが落ち着くまで主体展は中止でもしかたがないと思う。(女性)
- ネットで絵を観ることはできるが、やっぱり本物でないと感動が伝わってこない。(女性)
- 今、病氣静養中だが、来年は出品する予定。(女性)
- コロナ禍で絵画仲間ともなかなか会えず、職場でも息苦しい毎日。来年は皆さんの元気な顔が見られるといい。(女性)
- 高齢なので一回一回がとても大切な重みをおびているが、筆をとめて自分の作風をみなおす良い時間でもあった。コロナのあたえてくれた結果は決して悪いことばかりではない。(女性)
- 本年の延期決定で心労が重なったことと思う。やる、やらないを決めるのはつらいことだが、あの時やるとなったら無責任な事になっていただろう。やめていただいてありがたいと思った。(男性)
- Withコロナとか？世の中が変わっても、好きなものがひとつでもあって良かった。しかし好きイコール制作につながらない。(女性)
- 自分自身と向き合えた期間だった気がする。(女性)

- コロナ禍で主体展が中止になりがっかりして制作意欲がなくなりましたが、来年に向かって前向きに頑張っていきたい。(女性)
- 去年の主体展がとても刺激的だったので来年も本気で頑張りたい。(女性)
- 自らを表現し、作品と格闘しつつ創作し続けることがアーティストたる所以であり、それはコロナ禍の中にあっても変わらない。(男性)
- 不透明なこの気持ち、来年度の主体展に向けて制作したい。(女性)
- コロナ禍の下、個展をしているいろいろ勉強になった。(女性)
- 必要以上に恐れず、対策をとって描き続けたいと思う。(女性)
- 来年こそは通常通り開催していただきたい。(男性)
- 来年の主体展に向けて再び制作を始めている。やはり描くことは楽しい。(女性)
- 延期で時間が増え良かった、と思ったが結局、制作モードが緩み、キャンバスに向かう時間が減ってしまった。(女性)
- 再開を共に喜ぶ日のために制作を続けていく。(女性)
- 中止は妥当な判断であったと思う。担当の皆様のご苦勞はいかばかりであったかと察する。来年こそは開催できるよう制作に励む。(男性)
- 私はコロナになってしまった。絵は殆ど描けていない。(女性)
- 高齢者には会期が1年延びることは大変辛い。1日も早いコロナ禍の収束を願う。(男性)
- 主体展が永續するよう願っている。(女性)
- 主体美術の方々が大好きなので生涯仲間入りさせて頂きます。(女性)
- 出品作が完成していたので残念だったが、この状況では…。(男性)
- 目標(出展の)がないと描きたくないです。(女性)
- 来年は出展できるものと信じて作品作りに励んでいる。(女性)
- 高齢者の出品料負担を低減できないか検討をお願いします。(男性)

- どんな状況になっても板絵は描き続ける。(女性)
- アンケートの実施ありがとうございます。出品するだけの私達の声も拾って下さる主体美術の姿勢のすばらしさに感激。(女性)
- 主人が病気ですので制作は出来ません。(女性)
- 不安定な日々だが来年に向け気持ちを高め少しずつ制作していきたい。(女性)
- 健康でなければ何もできない。延期は良い判断だった。不安の中での開催はお互い自己責任という負担となる。(女性)
- 大腿骨骨折の為、歩くのも杖をつく様になり制作出来ぬかも知れず残念。(男性)
- この様なアンケートをいただき仲間入りができたと励みになる。(女性)
- 絵を離れ他に興味があることをやっていた。(男性)
- 役にもたないこんな大きな絵を描いて良いのか考えこんでいる。(女性)
- 展覧会がないとやはり意欲は減退。これではいけないと来年に向け頑張っていく。(女性)
- 私事だが医療現場でこの状況を目の当たりにして絵を描く事等罪の意識に囚われた。時間と共に明るい未来に繋ぐ絵を描き元気付けたいと思うようになった。(女性)
- 色々な展覧会がないと本当に窓が閉ざされたようだった。コロナと共存しつつ普段に近い生活をしっかりしていきたい。(女性)
- 何かを見出そうとしているが、なかなか見出せないでいる。(男性)
- 現状にはかなり用心し対処しているが、状況が好転し、主体展が開催可能となれば、これほど励まされることはない。(女性)
- 先の見えないコロナ禍で不安です。どうか無理のない判断をお願いしたい。(女性)
- 来年の主体展開催を祈ります。(女性、複数)

アンケートの結果から

アンケートにお応えいただきました皆様、ありがとうございました。Q5のご意見は空欄の方も多数いらっしゃいました。掲載にあたり紙面の都合上、文体を揃え、似た回答はまとめたことをお伝えしておきます。

2021年現在、感染者は更に増え続け、昨年の自粛期間よりも危険な状況になってしまいました。にもかかわらず意識の面でコロナ慣れもあるのか街は閑散、とはしていません。アンケート実施は昨年秋。殆どの方が外出を避けていることが読み取れます。そして、コロナへの不安からか、制作は「いつも通り制作していた」、「中断してしまった」がほぼ同じ割合ですが、加えて「描けなかった」が17%となります。

しかし、心強かったのは、Q4「来年の主体展へのお気持ちは」に対して、「意欲に燃えている」が24%、「不安だが制作を続けている」が59%を占めました。「意欲減退」17%をはるかに越えホッとしました。今年こそは出品者の意欲にも添えるよう、美術館が閉館しない限り、何としても開催に向け会員

一丸となって始動していきたいと思えます。

最後に、ご意見の欄への返答を付け加えたいと思えます。

「主体は本当に会員全員で審査をしているのでしょうか」とありました。総会と審査に出ること、これは会員の権利と義務です。しかしながら北海道から九州まで会員がいますので、諸事情により全員参加とはなりません。毎年85名前後審査に参加します。また、「大作と小品を比べるのはムリがありそうです」というご意見もありましたが、ひな壇に設置された審査室で小品も大作も差別なく公平に審査をしています。むしろ、そういった視点よりも画廊では得られない美術館という広いスペースに展示できるのですから、その喜びも味わっていただきたいと思えます。出品料は同じですが、勿論サイズは個人の自由ではあります。搬入まで7ヵ月あまり！共に主体展に向けて、制作に専念し頑張っていきましょう。

(文責)榎本香菜子、結城智子 (グラフ作成)黒川 洋

展覧会記録

2020年6月末～2021年1月末

- force展(伊藤明美 他)
2020年6月30日～7月26日
ギャラリー名芳洞(名古屋市)
- 大野五郎作品展
7月14日～11月23日
飛鳥山博物館アートギャラリー
(東京都北区)
- exhibition twice up! IV part 1
(久我英輔、新島知夏、前川アキ)
8月31日～9月6日
あかね画廊(銀座4)
- 現代作家が描くクレパス画
(山本靖久 他)
9月1日～9月26日
サクラアートミュージアム(大阪市中央区)
- 柿崎寛油絵展
9月3日～9月9日
渋谷・東急本店8階美術画廊(渋谷区)
- 第42回北海道ロビー絵画展
(齋藤典久、佐藤善勇、續橋守 他)
9月4日～9月16日
ギャラリー絵夢(新宿3)
- 金オーロ遊び展(斉藤望、種倉紀昭 他)
9月6日～9月27日
アートスペース泉(福島県いわき市)
- exhibition twice up! IV part 2(上野
信彦、大西佐頼、福田和幸、前山陽子)
9月7日～9月13日
あかね画廊(銀座4)
- 北海道9条美術の会ー2020年小・
色紙展(渡辺良一 他)
9月12日～9月18日
北海道画廊(札幌市)
- 未来を描く若手作家たち(小林宏至 他)
9月19日～10月18日
入間市博物館(埼玉県)
- 車崎典子展ー光と風のゆくえー
9月24日～9月29日
金井画廊(京橋2)
- 愛しき生きもの展(桑原雄一 他)
9月28日～10月3日
ギャラリー暁(銀座6)
- 現代作家が描くクレパス画展
(山本靖久 他)
10月5日～10月17日
林田画廊(京橋2)
- 高橋玲奈個展 ーまぶたのうらー
10月5日～10月17日
アートラボ・アキバ(台東区浅草橋4)
- clair-obscur
(井上樹里、小林宏至 他)
10月19日～10月31日
高輪画廊(銀座8)
- 齋藤典久展
10月22日～10月31日
画廊AKIRA-ISA0(横浜市)
- 2020女流画家協会新宿展
(松本恵美 他)
10月29日～11月9日
ヒルトピアアートスクエア(西新宿6)
- 第2回石ころ展
(大口満、関谷昌夫 他)
10月30日～11月2日
大島画廊(新潟県上越市)
- 〈風土〉に生きる・VII(柏木喜久子 他)
11月2日～11月7日
Gallery風(銀座8)
- 草莽の風展(松本恵美 他)
11月2日～11月7日
Ksギャラリー(銀座1)
- 岡本裕介個展
11月3日～11月8日
ギャラリー中井(京都市)
- CAFネビュラ展(長沢晋一 他)
11月4日～11月15日
埼玉県立近代美術館(さいたま市)
- 原田文子個展
11月5日～11月10日
すすきギャラリー“彩美”(千葉県白井市)
- 水戸麻記子絵画展 MITORAMA
ーMe and Devil Bluesー
11月10日～11月15日
札幌市資料館ミニギャラリー1(札幌市)

- 柿崎寛展
11月11日～12月12日
at.WALLS TOKYO(文京区)
- 山本靖久水彩画展 ー花想譜
11月13日～11月22日
画廊AKIRA-ISA0(横浜市)
- 結城智子展
11月16日～11月21日
光画廊(銀座7)
- 位相 ーDraw now(齋藤典久、長沢
晋一、中城芳裕、山本靖久 他)
11月19日～11月24日
コート ギャラリー国立(国立市)
- 女の仕事展10th
(柴田かよ子、水谷幸子、水野博子 他)
11月25日～11月29日
愛知県美術館ギャラリー(愛知県)
- 華・華・展(松本恵美 他)
11月30日～12月5日
Gallery 風(銀座8)
- 榎本香菜子展
ーミツパチの羽音は聞こえるかー
11月30日～12月5日
シロタ画廊(銀座7)
- 岩見健二油絵展
12月2日～12月7日
日本橋三越本店本館6階 美術特選画廊
- 白と黒の間に展
(柏木喜久子、長沢晋一 他)
12月7日～12月12日
ギャラリーGK(銀座6)
- 5人展 ー交差する刻ー
(柴田かよ子 他)
12月8日～12月13日
ギャラリー名芳洞(名古屋)
- Ange de Noel 15(山本靖久 他)
12月15日～12月26日
ギャラリー絵夢(新宿3)

- 2021年
- 新春ガラス絵展
(浅野修、井上樹里、中城芳裕、中村輝
行、山本靖久 他)
1月11日～1月16日
ぎやらいいサムホール(銀座7)
 - 第13回山口長男☆野見山曉治と
実専展(長沢晋一 他)
1月18日～1月24日
銀座ギャラリームサシ(銀座1)
 - 奏彩 ー7つの視点ー(山本靖久 他)
1月20日～1月26日
横浜高島屋7階美術画廊(横浜市)
 - 浅野修(虚と実)展
1月20日～1月30日
Ksギャラリー(銀座1)
 - 第5回 M-art'79展(山崎 弘 他)
1月25日～1月30日
画廊 宮坂(銀座7)



「旅で出会った風景とところ」
水村喜一郎 竹紙絵集より
「ひまわり」

※展覧会案内状を機関紙担当(山田)、ホームページ担当(長沢)にお送り
ください。(会員・出品者問わず掲載いたします)

機関紙「主体美術108号」制作スタッフ

- | | | |
|-------------|------------|-------|
| ■事務局作業者 | ■執筆者 | ■校正 |
| 福田 玲子(責任者) | 黒川 洋(広報) | 森脇 ヒデ |
| 藤田 俊哉(機関紙部) | 結城 智子(展覧会) | 三浦 順子 |
| 山田 礼二(機関紙部) | 齋藤 典久(会計) | 田中 和枝 |
| 榎本香菜子(研究部) | | 長沢 晋一 |
| 井上 樹里(研究部) | | 種倉 紀昭 |
| | | 大西 佐頼 |
| | | 岡本 裕介 |
| | | 大口 満 |
| | | 十河 幸喜 |
| | | 水村喜一郎 |

2021年 第56回主体展 日程

- 本 展／東京都美術館(上野公園)
2021年9月1日(水)～9月17日(金) 16日間(6日は休館)
公募搬入／2021年8月22日(日)・23日(月)予定
東京都美術館地下3階
- 京 都 展／京都市京セラ美術館本館2階南
2021年10月12日(火)～10月17日(日)
- 名古屋展／愛知県美術館8F
2021年10月26日(火)～10月31日(日)

日本画筆「清晨堂」
WEBサイト&ショップがオープンしました!

主体美術でも筆作りワークショップでお世話になり、毎年、
新会員に進呈しています清晨堂さんの筆がネットで購
入できるようになりました。工房からの情報、筆作り工程もわ
かりやすく見ることができます。ぜひご覧下さい。

<https://seishindoabe.com/>



携帯・スマホは
こちらから

編集後記

■コロナ禍の2020年を記録せねばとの想いで企画した今号。各コーナー執
筆の皆さん、アンケートに答えてくれた出品者の皆さんに感謝します。なか
でも印象的だったのは水村喜一郎さんのエッセイ。依頼の数週間後、郵送で届
いた原稿の素晴らしいこと。封筒の力強い筆書きの宛名、原稿用紙本文の味
のある直筆文字。書き文字をこんなに感慨をもって眺めたことは久しぶりで
す。寅さんから始まる内容にも唸る。眼福でした。(藤田俊哉)

■コロナの話ばかりで、そろそろ皆さんもうんざりしているかもしれません。
これから徐々に「山笑う」季節が到来します。私が東北(福島)に移住した最初
の春から、数種類の花が一度に咲き誇る山々と、その後の柔らかな薄緑色に
覆われる新緑に魅了され、毎年楽しみに待ちわびるようになりました。ただ、絵
にするには実物の風景には遠く及ばないと思い、あえて避けてきた負いがあり
ます。還暦を迎えるにあたり、そろそろ自分なりの福島を描いてみようかな
と考えているこの頃です。(山田礼二)